

毎年恒例の夏休み体験講座が終了しました。残念ながら「船で行く知床半島」と「ペルセウス流星群を見よう！」は天候が悪く中止になってしまいましたが、大人気の講座のなかから「土器づくり」の様子をお伝えします。



竪穴住居（わらドーム）の中で焼く



ストーンサークルの真ん中で焼く

## 土器づくり・土器焼き体験

夏休み体験講座「土器作りと・土器焼き体験」が8月4日と10日に行われ、参加者全員の作品が無事焼き上がり講座は終了しました。土器は博物館の中で作りましたが、焼きは竪穴「わらドーム」の内と外で分かれて行いました。

土器を直接火にあてて焼くと破損する事が多いため、あらかじめおきを作っておき余熱で熱しながら少しずつ温度を上げて焼きました。焼く時には土器内に灰を入れながら焼くと熱が全体に伝わり出来上がりも早いのでこの方法をとりました。参加者の作品を壊さないように十分に注意したことが幸いし、すべて破損しないでできあがりしました。

一方、高温状態の火の中に土器を入れると簡単に壊れるのを知ってもらうために、わざと高温の火の側で一つの土器を焼き一瞬にして壊れるのも見てもらいました。（松田）

## シリーズ「よくある質問」～その1～ 羅臼岳の正しい標高は1660m それとも1661m？

登山ガイドブックやガイド地図などに記載されている羅臼岳の標高がいくつかあるため、「正しい標高はどれか」という質問が来ることがあります。知床博物館の出版物の中でも以前の刊行物と最近のものとの数値が変わっている場合もあります。標高にいくつかの違いがあるのは、国土地理院の基本図（2.5万分の1地形図）の数値自体が変わってきたことが一つの理由です。この地形図に記載された羅臼岳の三角点の標高は1660.7m（昭和50年測量）、1660.1m（昭和56年修正測量）、1660.2m（平成7年修正測量：現在の基本図）と変わってきています。これは、測量には誤差が生じること、地殻変動によって実際に山頂の標高が変わってきたこと、GPSの利用など測量精度の変化によるものなどが理由として考えられます。これらの数値は四捨五入して使われると1661mと1660mの二とおりになります。

もう一つの混乱の理由は、現在の2.5万分の1（5万分の1も同様）基本図から、三角点の脇に「標石のない標高点」が記載され、1661mという・単位の数値が加わったことです。国土地理院は都道府県別山岳データ（全国1003山）をまとめていますが、これには1661mが使われ、備考欄に三角点の標高1660.2mが記されています。（ただし二等三角点羅臼岳の正確な数値は1660.15m＝国土地理院の基準点情報による）。羅臼岳山頂にある三角点の標石を見た方も多いと思いますが、山頂にはそこよりもわずかに高い部分があり、そこが「標石の無い標高点」なのかもしれません。とりあえず、現時点では羅臼岳の標高はm単位で1661m、より細かい表記なら1660.2mでも間違いでは無いと言えます。

ただ三角点＝最高地点とは必ずしもならないことから、現時点では羅臼岳は1661mとするのが良いと思います。

一方、国土の高さの基準としている「水準点」（国道沿いなどに設置されています）の標高が30年ぶりに変更されます。これも地殻変動により修正が必要になったからです。「地球が生きている証拠」と言えますが、羅臼岳の標高もまた変わるかもしれません。（中川）



2万5千分の1地形図「羅臼」  
（昭和50年測量、51年11月発行版）



同上地形図（昭和56年修正測量、57年8月発行版）



同上地形図（平成7年修正測量、8年3月発行版）

※いずれも2倍に拡大しています

今年の夏は一体どこにいったのでしょうか？  
楽しみにしている講座も天候が悪く、中止になることが多く残念でなりません。キリギリスの鳴き声も聞こえ秋の気配が感じられます。なんと短い夏なのでしょう。

（秋山）

発行 斜里町立知床博物館協力会 2002.8.15  
099-4113  
北海道斜里郡斜里町本町49 斜里町立知床博物館内  
TEL:01522-3-1256/FAX: 3-1257  
<http://www5.ocn.ne.jp/~museumps/>